

曹植の賦における「遊」と「独」

高橋 大輔

一 曹植における賦の意義

曹植、字は子建（一九二～二三二）の現存の作品は、賦・詩・樂府・頌・贊・銘・章・表・令・書・論・誄等、計二百三十篇以上に及ぶ⁽¹⁾。そのうち賦が四十四篇、詩が二十八篇、樂府が四十九篇と合わせて総作品の半分以上を占めているものの、この三者が同様の評価を受けてきたかというところではない。詩や樂府に対して賦の評価は低いと言わざるをえない。これは曹植に限ったことではなく、建安の賦全体についての評価でもある。例えば、『文選』のなかに建安の賦は二篇しか採られていない。兩漢二十六篇、晋十九篇、宋以後十一篇の作品が採られていることを考えると、その差は歴然としている。『文心雕竜』をみても、「明詩篇」「樂府篇」には、建安の詩と樂府を詳細に評しているが、「詮賦篇」では王粲と徐幹の二人に少しの評を与えているだけである。これらを見ると、やはり建安の賦の評価は高いものではなかったと言える。

賦とは、『釈名』に「賦は敷なり。その義を敷布するを言う」、陸機「文賦」に「賦は物を体して瀏亮たり」、『文心雕竜』「詮賦篇」には「賦は鋪なり、采を鋪き文を摘り、物を体して志を写すなり」とあるように、羅列・列挙の形式を採るものである。内容をみると漢代の主流であった叙事中心の賦が抒情を含むようになり、全体的に小品化した。鈴木修次氏は『漢魏詩の研究』の中で、建安の賦は社交辞令的、遊戯的であり、詩人たちのエネルギーは詩の方面に向けられたと述べている⁽²⁾。

では曹植にとって文学制作の意欲となったものは何だったのか。『三国志』巻十九の本伝及び注に載せられている「責躬」、「求自試表」、「与楊徳祖書」の三作品から考えていく。「責躬」では、「願わくは矢石を蒙るも、旗を東岳に建てんことを。庶わくは毫釐を立て、微功もて自ら贖わんことを」のように、戦場で矢や石を浴びてでも、魏の旗を呉との境に打ち建てたい。わずかでも功績をたてて、自分の罪を

願いたい、と述べている。「求自試表」には、「窃かに自ら量らず、志は命を効すに在り。庶わくは毛髮の功を立て、以て受くる所の恩に報いんことを。……必ず須臾の捷を効し、以て終身の愧を滅し、名を史筆に掛け、事を朝策に列せしめん」とあり、必ずや勝利をもたらし、生涯の恥をなくし、我が名を歴史に記載させ、功績を朝廷の記録に連ねさせよう、と述べる。また「与楊徳祖書」の中では、「辞賦は小道にして、固より未だ以て大義を掄揚し、来世に彰示するに足らざるなり。昔楊子雲は先朝執戟の臣のみにして、猶お称す壯夫為さざるなり、と。吾徳薄しと雖も、位は藩侯為り。猶お庶幾わくは力を上国に勸せ、恵みを下民に流し、永世の業を建て、金石の功を留めんことを。豈に徒だ翰墨を以て勲績と為さんや、辞賦もて君子と為さんや。若し吾が志未だ果たされず、吾が道行われずんば、則ち將に庶官の実録を采り、時俗の得失を弁じ、仁義の衷を定め、一家の言を為さんとす」とある。辞賦は小道と言ひ、近隣の国々と力を合わせて、恵みを民衆に施し、永遠に残る業績を成し遂げ、金石に刻まれるような功をたてたい。どうして筆や墨をもって誉れとしようか。もし自分の志が果たされなければ、文章で名を揚げたい、というのである。政治に参加して功績をたて、それによつて後世にまで名を残すことが、曹植の願ひの一つであつたことは否定できない。このような願望をもつに至つた背景として、兄である曹丕が即位すると、同姓の諸王を任地に追いやり、中央での政治には関与させない方針をとつたことが挙げられる。曹植も例外ではなく、たびたび都から離れたところに領地を移されており、その状況では名を残すような功績を挙げることは不可能であつた。そこで上疏して自らの思いを訴えるに至つたのである。

曹植の作品には国に貢献して名を残したいという志が流れており、賦も例外ではなかつた。賦の中でも「玄暢賦」の「千載を逸して声を流し、遺黎を超えて俗を度らん」や、「節遊賦」に「諒に遺名の紀すべき、信に天命の常無し」と見えるように、後世に名を記したいという思いを示している。だが現実では、名を残す機会に恵まれず、願ひが果たされることはなかつた。そこで「感節賦」に「榮徳の身を累ぬるに匪ずして、年命の早暮を恐る」と述べるように、国に貢献することなく時間だけが過ぎ去っていく状況を憂ひたのである。遊戯的だと考えられていた建安時代の賦の中で、曹植の賦は修辭技巧に耽溺せず、何を言うかに重きを置いていたと考えられる。「言志」という伝統的な考え方、つまり文学が政教道徳と密接に関わっているという考えをもつて賦を作っていたのである(3)。曹植にとつての辞賦とは自己表出であり、大義の表明だつたと言える。本稿では、「遊」と「独」の表現の考察を通して、賦独特の表出が為されていたことを明らかにしたい。

二 志の果たされない「遊」

この章では、曹植賦における「遊」の考察を行っていく。「遊」は「游」と同じで、「水の中を泳ぎまわる」というのが元の意味である。そこから「出歩く」といった意味や「楽しむ」という意味が派生した。なぜ「遊」に着目したかというと、その「遊」という行為が、楽しむどころか憂いを生じさせる原因、もしくは憂いを喚起させるものとなっているからである。その理由と憂いの根源について考察を進めていく。曹植賦にみえる「遊」として、高い所に登る、駕して遠くに行く、という二つの行為を挙げることができる。最初に挙げる「遊観賦」は、前者の例である。

遊観賦

静閑居而無事、將遊目以自娛、登北觀而啓路、涉雲際之飛除。

（静かに閑居して事無く、將に目を遊ばせて以て自ら娛しまんとす。北觀に登りて路を啓き、雲際の飛除を渉る）

ここでは憂いが描かれることはなく、何かをみて楽しむという際に、たかどのに登って視界が開ける様子が描かれている。それに対して、次に挙げる「節遊賦」ははっきりと憂いを述べている。この賦は友を誘い、一緒に車に乗って出かける様子を詠う。この「遊」は駕して遠くに行く、という形である。

節遊賦

命友生、携同儔。誦風人之所歎、遂駕言而出遊。步北園而馳驚、庶翱翔以解憂。且容与以尽觀、聊永日而忘愁。嗟羲和之奮迅、怨曜靈之無光。念人生之不永、如春日之微霜。……………

（友生に命じ、同儔を携う。風人の歎ずる所を誦え、遂に駕して言に出遊す。北園に歩みて馳驚し、庶わくは翱翔して以て憂いを解かんとことを。……………且に容与して以て觀を尽くし、聊か日を永くして愁いを忘れんとす。羲和の奮迅するを嗟き、曜靈の光無きを怨む。人生の永えならざるを念えば、春日の微霜の如し。……………）

ここで描かれる憂いは二つある。翱翔して解くことができるということは、逆に言えば現在翱翔していないのである。これは鳥のように翱翔できないことから生じる憂い、つまり自分が自由ではないという認識に基づく憂いである。曹植は自分を束縛する存在を感じ、そこからの解放を求めていたのである(4)。この束縛とは、おそらく現実社会における国家権力を指すと考えられる。監国謁者による監視や、都から離れた土地への領地替えなど国による統制の厳しさを感じていたのではないか。もう一つの憂いは過ぎ去る時間に対するものである。のんびりと景観を眺め尽くし、ゆっくりと時間を過ごすことで憂いを忘れようとするけれども、時間の流れを意識した時、再び憂いが生じるのである。この作に見える「遊」の行為は、憂いを解消するものではなく、むしろ自分の境遇を認識し、過ぎ去っていく時を実感することになる。そのため、「遊」を描くことが憂いを生むきっかけとなっている。次に挙げる「感節賦」も同じく、悲哀からの解放を願い、また時間に対する憂いを述べる作品である。

感節賦

携友生而遊觀、尽賓主之所求。登高墉以永望、冀消日以忘憂。……唯人生之忽過、若鑿石之未燭。亮吾志之不從、乃拊心以歎息。青雲鬱其西翔、飛鳥翩而止匿。欲縱体而從之、哀余身之無翼。

(友生を携えて遊観し、賓主の求むる所を尽くす。高墉に登り以て永く望み、冀わくは日を消して以て憂いを忘れんことを。……唯れ人生の忽として過ぐるは、石を鑿ちて未だ燭かざるが若し。亮に吾が志の従わず、乃ち心を拊して以て歎息す。青雲鬱として其れ西翔し、飛鳥翩として止匿す。体を縦ちて之に従わんと欲するも、余の身の翼無きを哀しむ)

友人とともに高い台に登り、そこで時間を過ごして憂いを忘れたいと願っている。「節遊賦」と同じく、過ぎ去る時間に対しての嘆きが描かれている。ここではさらに、人生がたちまち過ぎ去ってしまったのは、石がなかなか輝きをみせないようなものだ述べる。時間に対する焦りは、英名を揚げていないことに起因するのである。そして飛鳥に付き従って飛んでいきたいと思うけれど、翼を持たない身ではそれかなわず、悲しさがこみあげてくるのである。これも高い所に登るという行為によって憂いが再確認され、その結果「無翼」の自分を悲しく思うのである。この中に見える憂いは、名を後世に記すような活躍の機会もなく時間だけが過ぎ去ってしまうという焦りと、飛鳥のように自由に生きることが不可能だという憂いである。「節遊賦」に見えた「翱翔」と同じく、自由を求めてもかなわない悲哀を述べている。

ここでの「遊」も、思いのかなわない愛いを導き出すものとなっている。次に挙げる「感婚賦」は翼を求めはしなくても、願いのかなわない悲しみを詠むものである。

感婚賦

陽氣動兮淑清、百卉鬱兮含英。春風起兮蕭條、蟄虫出兮悲鳴。願有懷兮妖嬈、用搔首兮屏營。登清台以蕩志、伏高軒而遊情。悲良媒之不顧、懼歛嬈之不成。慨仰首而太息、風飄飄而動纓。

（陽氣動きて淑清たり、百卉鬱として英を含む。春風起りて蕭條たり、蟄虫出でて悲鳴す。願りみて懷うこと有りて妖嬈たり、用て首を搔きて屏營す。清台に登り以て志を蕩し、高軒に伏して情を遊ばす。良媒の顧みざるを悲しみ、歛嬈の成らざるを懼る。慨き仰首して太息すれば、風飄飄として纓を動かす）

穏やかな氣候につつまれ、生い茂る草木や咲いている花を目にし、静かな台に登り手すりに寄りかかって心をめぐらすのである。ここから一転して良い仲人に目をかけられず、婚姻が成立しないことを憂う様子が描かれる。高い所に登つての「蕩志」、「遊情」という行為を起点として、自分の置かれた境遇に対する不安が湧き起こる。ここでの「遊」も愛いを生み出す役割を担っており、願いがかなうことはないのである。次に挙げる「愁霖賦」、「臨觀賦」も愛いを生む「遊」、願いのかなわない「遊」である。

愁霖賦

迎朔風而愛適兮、雨微微而速行。悼朝陽之隱耀兮、怨北辰之潛精。車結轍以盤桓兮、馬踟躕以悲鳴。攀扶桑而仰觀兮、俛九日於天皇。瞻沈雲之決滂、哀吾願之不將。

（朔風を迎えて愛に適けば、雨微微として行くに速ぶ。朝陽の曜を隠すを悼み、北辰の精を潜めるを怨む。車轍を結びて以て盤桓し、馬踟躕し以て悲鳴す。扶桑に攀り仰ぎ観れば、九日を天皇に俛る。沈雲の決滂たるを瞻、吾が願いの将わざるを哀しむ）

車に乗って外に出れば、馬は足踏みして進まなくなり、扶桑に登って、九つの太陽を天の神に見立てていると、幾重にも重なった雲が

湧き出てきて空を覆い隠してしまう、という内容である。思いがけなく望みが頓挫し、自分の力ではどうしようもない悲しみが表れている。「遊」が心を楽しませることにはならず、思い通りにいかない悲哀だけが残るのである。

臨觀賦

登・高・壙・兮・望・四・沢、臨・長・流・兮・送・遠・客。春・風・暢・而・氣・通・靈、草・含・幹・兮・木・交・莖。邱・陵・嶺・兮・松・柏・青、南・國・變・兮・果・載・榮。樂・時・物・之・逸・豫、悲・予・志・之・長・違。……進・無・路・以・效・公、退・無・隱・以・營・私。俯・無・鱗・以・遊・遁、仰・無・翼・以・翻・飛。

(高壙に登り四沢を望み、長流に臨み遠客を送る。春風暢びて気靈に通じ、草幹を含み木莖に交わる。邱陵嶺として松柏青たり、南国變として果載ち榮す。時物の逸豫を楽しみ、予の志の長く違うを哀しむ。……進むに路の以て公に效す無く、退くに隱の以て私を営む無し。俯きては鱗の以て遊遁する無く、仰ぎては翼の以て翻飛する無し)

高いかきに登って四方を眺め、遠くからやってきた客を送る。周りを見渡せば、自然は生き生きとそのあるべき姿を見せているのに対し、自分の志は思うように果たされることはない。そんな自分は国家に貢献することもなく、隠れて自分の利益を追い求めているわけでもない。目にする光景は、魚が泳ぎ回ることではなく、鳥が翻り飛ぶこともない。この賦は、高い所に登る行為に始まり、前半で自然のあるべき姿を描き、後半では魚が泳いではおらず、鳥も飛んでいないという不自然な情景を詠んでいる。その両者を結ぶ句が、「志の長く違う」という句である。どこを見ても魚が泳ぎ回り、鳥が飛び交う様子を見ることができないということは、本来あるべき姿でないこと、すべきことができていないことを喻えているのである。これが「志の長く違う」内容であり、志を果たせない悲しみが描かれている。

ここまで見てきた曹植の「遊」とは、「登高」または「駕出」といった行為が基本的な形である。それもほしのままに遊ぶのではなく、何らかの意志をもった行為である。その意志とは大空を翔ける鳥のように自由を得たい、自分の志に従って生きていきたい、というものである。その思いが飛鳥を描くこと、そして思い通りにいかない現実を描くことにつながっていく。束縛のなかで生きている自分にとって、飛鳥が羨ましく思えたのである。「登高」「駕出」は、広い視点や大きな動きを得るためのものであり、飛鳥への憧憬がこの行為に反映されている。つまり「登高」「駕出」という行為は、飛鳥のような生き方に近づきたいという願いによって選択された行為であったと言える。しかし、飛鳥への憧憬に端を発する「遊」は、結局その願いがかなうことにはないという悲哀にたどりつく。しきりに思いがかなわな

い悲しみを詠うことは、遊戯と呼ぶにはふさわしくない。やはり、賦は思いを込めて詠うに値するものだったのである。

三 友を求める「遊」

ここまで主に志の果たされない「遊」を見てきた。「遊」に描かれるもう一つの憂いは、友のいない悲しみを詠うものである。ここからは、「遊」に見える友や思いを寄せる存在について考察していきたい。最初に挙げる「間居賦」は、友のいない生活を嘆くものである。

間居賦

何吾人之介特、去朋匹而無儔。出靡時以娛志、入無樂以銷憂。何歲月之若驚、復民生之無常。感陽春之發節、聊輕駕之遠翔。登高丘以延企、時薄暮而起雨。……

（何ぞ吾人の介特なる、朋匹去りて儔無し。出でては時の以て志を娛しましむる靡く、入りては楽しみの以て憂いを銷す無し。何ぞ歲月の驚するがごとくして、復た民生の常無からん。陽春の節を發くに感じ、聊か輕駕して遠く翔く。高丘に登り以て延企し、時は薄暮にして雨起る。……）

自分の孤独を描き、それが友のいないことに起因すると述べる。そのため何をしても楽しいと思わず、憂いも消えることはない。そんな時間が積み重なり、あつという間に歳月が過ぎ去ってしまう。そんな時、春の訪れを感じ、駕して遠く駆けていき、丘に登って遠くを眺めやるのだが、そんな自分の楽しみを遮る雨が降ってくるのである。この賦では、友のいない現実が時の流れを早く感じさせる。友が去ってしまった状態で外に出ても、自分の楽しみを遮る雨が降る。降る雨は曹植の暗澹たる心情を暗示していると言える。友はいない、さらに自分で心をはらそうとしてもかなわない、という閉塞した状況を嘆いているのである。

ここでの「遊」は、憂いを解消させるどころか、むしろ悲しさを増すのである。次に挙げる「愍志賦」は、隣人の女を慕っていたけれど、良い仲立ちがなく、結局他の男のもとへ嫁いでしまうことを詠んでいる。

窃託音於往昔、迄來春之不從。思同遊而無路、情壅隔而靡通。哀莫哀於永絕、悲莫悲於生離。豈良時之難俟、痛予質之日虧。登高樓以臨下、望所歆之攸居。去君子之清宇、歸小人之蓬廬。欲輕飛而從之、追札防之我拘。

（窃かに音を往昔に託し、來春の從わざるに迄る。同に遊ばんと思えども路無く、情壅隔して通ずる靡し。哀は永絶より哀しきは莫く、悲は生離より悲しきは莫し。豈に良時の俟ち難く、予の質の日々に虧くを痛まんや。高樓に登り以て下に臨み、歆ぶ所の居る攸を望む。君子の清宇を去り、小人の蓬廬に歸ぐ。輕飛して之に従わんと欲するも、追ち札防もて我を拘えん）

共に遊ぼうとしてもその手立てもなく、私の思いも遠く隔てられて通じることではない。永遠の別れより哀しいことはなく、生きたまま別れることほど悲しいことはない。良い時節にはめぐりあえず、我が身は朽ちていくばかりである。そこでたかどのに登つて思う人を眺めやり、その人のもとへ行こうとするのだが、札防による障壁によって妨げられてしまうのである。「札防」は、『札記』坊記に、「夫れ札は民の淫る所を坊ぎ、民の別を章かにし、民をして嫌無からしめ、以て民の紀と為す者なり」とある。「坊」は「防」と同じであり、「札防」とは民が道をはずさないようにするための規律と考えられる。ここでの憂いは、思い人の所へ行こうとするも、それが妨げられることで生じる。本来民に正しい道を歩ませるはずの「札防」が、思いを妨げる存在として描かれるのである。国の決めた法令が実は自分を苦しめていることを喩えて言っているのである。この賦と「問居賦」を合わせて考えてみると、思慕する相手との離別による哀感が強く表れている。この賦で述べている「永絶」「生離」のような離別の表現は、曹植の作品に多く見ることができ、実際に親しい者との別れを経験している。(5) 曹植は離別の続く状況で何もしなかったわけではない。文帝が親族との深い交際を禁じた際には「求通親親表」を奉つてもいる。しかし結局彼の思いが通じることにはなかった。

曹植の「遊」は、志が果たされないことによる憂いと離別による憂いを描き出していた。この二つの憂いは曹植の慷慨を形作る大きな要因であったと言える。憂いを解くための真の「遊」とは、束縛から解放されて自由になり、思う存分自分の志を遂げることであった。だがそれがかなわない現実の「遊」は、「無翼」の自分という現実を認識する行為となるのである。その悲哀の裏には、自由を束縛し、知己の存在を奪ってしまう権力への不満が表れている。このように「遊」のもののびやかなイメージの中に深い悲哀感を投影させたところに、曹植の独自性がある。儀礼的であった場を「言志」の場としたことは、当時の賦の流れを打ち破って、新たな側面を加えたと言つて

よいだろう。

四 新たな「独」

この章では曹植の「独」について考察していく。三章でみた「友」を望む姿勢は、離別を経験することによって培われたものであると述べた。そこにみえる孤独感は、間違いなく悲しいものである。だが、曹植の孤独が全て悲哀と結びつくのだろうか。私は「独」の表現に「群れ（集団）」から離れてしまう孤独」と「他に抜きんで優れる孤独」の二つの要素が混在していると考えた。そこには悲哀だけではなく、孤独を肯定する姿勢がみられるのではないか⁽⁶⁾。この章では詠物賦を中心にして、曹植の孤独を異なった観点からみていこうと思う。「離群」の題材として鳥が詠まれることが多く、ここでは群れ（もしくは連れ合い）と離れてしまう「独」が描かれる。ここでは群れを離れる原因となるもの・群れを離れてしまう様子・その後の結末、という三点に絞って、「鸚鵡賦」「離鵝雁賦」「白鶴賦」の作品を取り上げて考察していく。

鸚鵡賦

美洲中之令鳥、超衆類而殊名。感陽和而振翼、遁太陰以存形。遭旅人之嚴網、殘六翮而無遺。身挂滯於重縲、孤雌鳴而獨歸。……
蒙含育之厚德、奉君子之光輝。……

（洲中の令鳥を美し、衆類に超えて名を殊にす。陽和に感じて翼を振い、太陰を遁れて以て形を存す。旅人の嚴網に遭い、六翮を残いて遺す無し。身は重縲に挂滯せられ、孤雌鳴きて独り歸す。……含育の厚德を蒙り、君子の光輝に奉ず。……）

この賦は、旅人の仕掛けた網によって雄の鸚鵡が捕らえられ、捕らえられなかった雌の方は独りで去っていく。一方捕えられた雄の鸚鵡は手厚く育てられ、その徳に報いようとするのである。ここでも二、三章で触れた束縛を表す「嚴網」が描かれ、その結果生命の危機に瀕するのである。だが悲哀に沈んだまま作品が終わるかというところではない。孤独の悲しみから、相手の徳の賛美へと話が転換していく。ただし、この賦は後漢の裨衡の作品に基づいた作と考えられ、裨衡の作品とも共通点が多いため、これ以上の考察は控えておく。次に「離

繖雁賦」を挙げる。

離繖雁賦

憐孤雁之偏特兮、情憫焉而内傷。尋淑類之殊異兮、稟上天之休祥。……望范氏之發機兮、播纖繖以凌雲。掛微軀之輕翼兮、忽頽落而離群。旅暗驚而鳴遠兮、徒矯首而莫聞。甘充君之下厨、膏函牛之鼎鑊。蒙生全之顧復、何恩施之隆博。……

(孤雁の偏特なるを憐れみ、情憫みて内傷す。淑類の殊異に尋りて、上天の休祥を冀く。……范氏の機を発し、纖繖を播きて以て雲を凌ぐを望む。微軀の輕翼に掛かり、忽ち頽落して群を離る。旅暗驚きて鳴くこと遠く、徒に矯首するも聞く莫し。充君の下厨に甘んじ、函牛の鼎鑊を膏す。生全の顧復を冀り、何ぞ恩施の隆博なる。……)

この賦では、繖にかかつて群れから離されてしまう雁の姿が描かれる。だが生命が奪われることはなく、その恩恵に感謝の念を示している。孤独な雁を描きながら、その悲哀と同時に生命を救ってくれた相手を讃える姿が描かれる。雁を詠んだ賦は、時代は下るものの晋の時代にも見ることができる(7)。ここでは曹植が「繖に離る」雁を描いたという点に着目したい。曹植が作品中に描く雁は、悠々と天地の間を飛び回るものではなく、苦難に遭う姿である。ではなぜそのような状況に追い込まれるのか。罪もないのに害されるのは、無能だからではない。優れているからこそ、害される対象となるのである。曹植は意図的に優れた存在が苦しめられるという状況をつくりあげ、そこに自らの不遇と、優れているがゆえの孤独という自負を込めたのである。次に挙げる「白鶴賦」も、本来「独」になるはずではなかったけれども、定則に反して「独」になってしまう姿が描かれる。前の二つの賦と違う点は、束縛する存在から解き放たれて自由になりたいという思いをはっきり示している点である。

白鶴賦

嗟皓麗之素鳥兮、含奇氣之淑祥。……痛美会之中絶兮、遭嚴災而逢殃。共太息而祗懼兮、抑吞声而不揚。傷本規之違迂、恨離群而独处。……冀大綱之解結、得奮翹而遠遊。

(嗟皓麗の素鳥なるや、奇氣の淑祥たるを含む。……美会の中絶するを痛み、嚴災に遭いて殃に逢う。共に太息して祗懼し、吞声を

抑えて揚がらず。本規の違迂を傷み、群を離るるを恨みて独り処る。……冀わくは大網の結ばれるを解き、翅を奮うを得て遠遊せんことを)

「本規之違迂」とは、元々定まっていたものが反することであり、この「独」は予定外のものだったのである。何が起こったかというところ、良いめぐりあわせが途中で途切れ、厳酷な災いにあったのである。孤独となった自分は「大網」に絡められ、翼をはばたかせることができず、当然遠くへ飛んでいくこともできない。「大網」とは「賁躬」にある「天網不可重罹（天網重ねて罹るべからず）」の「天網」や「野田黄雀行」の「拔劍捎羅網（劍を抜きて羅網を捎う）」の「羅網」と同じものである。自分を束縛する存在を、いったん捕えられたら自分の力だけでは逃がられない「網」のように感じていたのである。他に鶴を詠んだ賦と比べると、曹植の描く鶴は強く孤独を感じさせるものとなっている(8)。

これらの賦に詠まれている鳥は、全て「鸚鵡賦」の「超衆類」や、「離鵝雁賦」の「淑類之殊異」、「白鶴賦」の「奇氣之淑祥」のように、他より優れた性質をもっている。しかしそれでも群れを離れてしまうという困難にあうのである。むしろ優れた性質をもっているからこそ、捕えられる不運にあうとも言える。その状況から逃れたいけれど、そのためには、他者の善意に期待するしかない。「鸚鵡賦」と「離鵝雁賦」にみえる生命の救済は明らかにそのことを示しているし、「白鶴賦」の「網」の存在も誰かに取り払ってほしいという願いが「冀」という語にはつきりと込められている。確かに「離群」という大きな困難にであうけれども、そこには一抹の希望が残されているのである。「独」にするのが他者ならば、それを救うのも他者なのである。

このような描写について、自分の姿をうつして、彼自身の不遇、周囲を取り囲む切迫した状況を示している、といった解釈は既に何度もなされてきた(9)。私はそれだけではなく、孤独になる対象の条件として優れた性質を備えていた、ということが根底にあったと考えたい。阻害される鳥はまさしく自分の姿であるものの、そんな自分は優れているという自負があった。さらにそんな自分を救う存在がいるはずだという希望をもっていたのである。そのため孤独の悲哀だけが描かれて作品が結ばれるのではなく、他者の恩恵を賛美し、また束縛からの解放を願ったのである。さらに「他より抜きんで優れた孤独」について考察を進めていく。

静思賦

曹植の賦における「遊」と「独」

卓特出而無匹 卓く特り出でて匹無く
呈才好其莫当 才好きを呈して其れ当たる莫し

酒賦

嘉儀氏之造思 儀氏の造思を嘉す
亮茲美之独珍 亮に茲の美の独り珍なるかな

車渠碗賦

何明麗之可悦 何ぞ明麗の悦ぶべき
超群宝而特章 群宝を超えて特り章る

迷迭香賦

去枝葉而特御兮 枝葉を去りて特り御し
入綃縠之霧裳 綃縠の霧裳に入る

ここで挙げた四例は皆「抜きんでて優れている」存在である。「静思賦」では「性通暢以聡明、行靡密而妍詳（性通暢にして以て聡明なり、行靡密にして妍詳たり）」と、性行の秀でてゐるがゆえの「独」と述べる。「酒賦」では、『史記』高祖本紀にある、漢の高祖が酔つて蛇を斬り道を開いたことや、『史記』信陵君伝を引いて、戦国時代、魏の侯嬴が信陵君の酒宴での扱いを意気に感じ、力を尽くしたという故事を用いて、酒が優れていて貴重なものだと述べる。「車渠碗賦」には「既娛情而可貴、故求御而不忘（既に情を娛ませて貴ぶべし、故に御して忘れざらんことを求む）」とあり、心を樂しませて貴ぶべきものである以上、この碗を忘れないようにしよう、という。このように碗が貴ぶに値するほど優れていることを称えている。「迷迭香賦」では「芳莫秋之幽蘭、麗崑崙之芝英（芳は莫秋の幽蘭のごとく、麗なること崑崙の芝英のごとし）」と述べ、かぐわしい香りと崑崙山に咲く花のように美しいとしている。これらは対象・方法は違ふけれど、

人々の心を動かしている。「拔きんでた孤独」は、悲哀を生むものではなく誇るに値するものである。この意識こそ、本来悲哀感につつまれてしまう「離群」の「独」でも、「独」を肯定することができた理由である。

今までみてきたように曹植の視点は常に「群」ではなく「孤」に向けられ、孤独の悲哀と賛美を述べている。ただ「離群」の「独」などは、やはり悲哀の情が強いと言える。優れた性質において「独」になるのは良いが、仲間や連れ合いと離れての「独」はやはり受け入れ難かったのである。鈴木修次氏は、賦が人間の本質にせまるという方向に不向きであったと述べている⁽¹⁰⁾。これは、単なる事物の羅列・列挙に終始するならばその通りだと言える。しかし、曹植の作品に目を向けるならば、悲哀と賛美の両面を持ち合わせた孤独、という意識をみることができる。それが特に詠物賦に表れているということは、曹植の内面に、孤独に対して、否定と肯定の意識が芽生えていたことに他ならない。つまり、曹植の賦は、外界から喚起させられた感情を、内面にある自分の思いと感応させ、さらにそれを外に表出するという、自己内省を経た創作であった。これは人間の孤独という本質に迫るものだったと言える。

五 曹植賦の特徴

曹植賦には、為政者としての志を果たせない焦燥感や悲哀感、彼の経験してきた離別による憂愁の念などが大きく関わっている。さらに「遊」と「独」の表現から考察を進め、本来樂しむべき「遊」が憂いを表し、また本来悲哀の情が強くみられる「独」の表現に孤独を肯定する意識をみることができた。曹植の独自性は、多くの人がイメージするであろう世界を逆に利用したことにあると言える。宮廷文学と結びついた賦という形式は、目にする相手が限定されるという点で制約も多かったはずである。しかし、だからこそ曹植は自らの思いをそこに凝縮させたのではないだろうか。その中で常にもちつづけていたのは、自分の思いが届くであろうという期待である。それは善意への信頼からくるものであり、その態度を示し続けていた。曹植は「九愁賦」で、「寧作清水之沈泥、不為濁路之飛塵（寧ろ清水の沈泥と為るとも、濁路の飛塵と為らざらん）」と、正しい世界の中で水底に沈んでいる泥のような存在でよい、ただ濁った世の中で生きたいとは思わない、と述べている。これは屈原を意識した言葉であり、屈原と同じく「清」の世界を望んだのである。しかし決定的に異なっているのが、死を選んだ屈原に対し、曹植は「九愁賦」で最後にこう述べることである。「亮無怨而棄逐、乃余行之所招（亮に怨む無くして棄逐せらるは、乃ち余の行いの招く所なり）」曹植は自分の行い次第では、このようなことにはならなかったと最後まで信じている。

この先自分の活動如何によつて、現実を変えていくことができる、というのである。曹植は人を救えるのは人の行いだけという考えをもっていた。その人間のもつ可能性を信じ、至誠の態度を表明しつづけた曹植は、やはり現実への希望を強くもっていたと言える。

注

- (1) テキストは、丁晏の『曹集銓評』（文学古籍刊行社、一九五七年）を用いた。
- (2) 鈴木修次『漢魏詩の研究』（大修館書店、一九六七年）に、要約すると、「建安における賦の主要な創作活動は、宮廷生活をめぐっての社交辞令的文芸、遊閑、遊戯としてなされる傾向が強かった。宮廷文学として賦を作るのが習慣であったから、習慣的に作賦活動をなしたのであり、創造する、という文学制作の意欲は、なにかほかの方向へ移ってしまっているとする言える。その方向とは、当然、作詩活動の世界であつたはずである。」と述べてある。
- (3) 鈴木修次『魏晉六朝時代の文学認識』（『国文学漢文学論叢』第十輯、一九六五年）を参考にした。
- (4) 中野将『悲哀からの飛翔——『詩経』・『古詩』・曹植——』（『中国文化』四九、一九九一年）に、「曹植にとって「天」は解放された世界であり、そこに身を解き放つとき、現実の悲哀から逃れることができた。」とある。
- (5) 『三国志』本伝には、曹植と深い付き合いのあつた楊修や丁兄弟を誅した事件が載せられている。曹植の詩には「離友其二」の「感離隔兮会無期」や、「送应氏其一」の「清時難屡得、嘉会不可常」、「贈白馬王彪其七」の「離別永無会」などの表現がある。
- (6) 富永一登「孤」を用いた文学言語の展開——陶淵明に至るまで——（『宋明』中文研究会、二〇〇四年）には、『毛詩』と屈原の作品には見られなかった「孤」を用いた言葉は、「鰥寡独孤」を主としたイメージに始まり、後漢から建安期にかけて多様化の兆しが現れ、文章表現の比喩ではあつたが、陸機による積極的評価を経て、陶淵明に至って完全に自己の心情を象徴するものになった。」とある。
- (7) 『全晋文』に晋の羊祜の「雁賦」があり、同じく晋の成公綏の「鴻賦」がある。

雁賦 晋 羊祜

鳴者相和、行者接武。前不絶貫、後不越序。齊力不期而並至、同趣不要而自聚。当其赴節、則万里不能足其路。苟泛一壑、則衆物不能易其処。臨空不能頓其翼、揚波不能灑其羽。排雲墟以顧頽頽、汰弱波以容与。進輒凌鷺于秦清、退嬉魚乎玄渚。浮若漂船乎江之濤、色若委雪于岳之阿。邕邕兮悲

鳴乎雲間、因風臨虛厲清和。眇眇兮瞥若入清塵、扶日弘翼揚光羅。

鴻鴈賦 晉 成公綏

辰火西流、秋風厲起。軒翥鼓翼、抗志万里。起寒門之北垠兮、集玄塞以安處。賓弱水之陰岸兮、有沙漠之絕渚。奔巫山之陽隅兮、趁彭沢之仮商。過雲夢以娛遊兮、投江湖而中憩。尽顧眎以候遠、夜警巡而相衛。上渾關于丹霞兮、下濯足于清泉。經天地仮極兮、樂和氣之純燠。

(8)『全後漢文』に王粲の「白鶴賦」があり、『全晉文』には桓玄の「鶴賦」がある。

白鶴賦 王粲

白翎冥靈龜之修壽、資儀鳳之純清。接王喬於湯谷、駕赤松於扶桑。餐靈岳之瓊蕊、吸雲表之露漿。

鶴賦 桓玄

惟茲禽之受命、諒誕生於悠邈。擢高距以自抗、延脩頸以軒矚。分績玄以發藻、通太素其如玉。縱眇矚於雲裔、豈四海之難局。練妙氣以適化、孰百年之易促。稅雲駕於三山、抃鸞皇於崑岳。

(9)小守郁子『曹植と屈原―付「風骨」論―』(私家版、一九七九年)に、これらの賦と「神龜賦」「蟬賦」などの詠物賦は、「自己仮託を顕著な特徴としている。」とあり、楊柳橋「曹植辞賦初探」(天津社会科学 一九九二―二、一九九二年)にも、「写了很多仮託物類来比擬自己的短賦。」と、対象に自己を擬えて描写することが多いと述べられている。

(10)前掲(1)『漢魏詩の研究』に「建安の賦においては、孤独の自己において作られたものとして考えられるものであっても自己の内面の凝視ということとはあまりなされず、ことばにおいて虚飾の華を咲かせるというところに、主要な関心がはらわれているということができよう。」とある。

(筑波大学大学院人文社会科学研究科博士課程)